



## 楓 意

枕 淳

(訳 萩田麗子)

晩秋といえば、どうしてもうら寂しくもの悲しい気持ちになってしまう……  
地面いっぱいの落ち葉、すべての木々の枝は枯れ、目の前に広がるのは荒涼とした景色。

だが今日はそうではなかった。昭和記念公園<sup>1</sup>は私に教えてくれた。秋の色は貧しくはなく、その魅力は素晴らしいものだ、と。

光り輝く淡い金色の銀杏<sup>いちょう</sup>の木々は隊列を成し、地面いっぱいの落ち葉は、客を迎えるためにわざわざ金色の絨毯を敷いてくれたかのようだ。華麗ではないが、かえって高貴さが感じられる。

そして、今この時まで私を酔わせているのは、あの炎のように激しく燃えてい

るような色の紅葉だ。ひょっとしたら、紅葉は西風が醸造した酒に知らず知らずのうちに酔わされてしまったのではないだろうか。そうでなければ、あの紅葉があんなに真っ赤な色になるはずはない。

杜牧にこのような詩がある。「……霜葉紅於二月花<sup>2</sup>」。

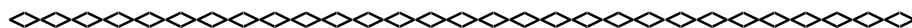
今日、私もこの「秋の酒」を飲んで、恥を省みずに一句詠むとするならば「敢於春鮮争嬌艷（大胆にも春の鮮やかさと嬌艶を競いたるか）」とでもなるだろうか。

日本庭園、それは人を心安らかにする場所にはちがいないのだが、今日、そこには力がみなぎっていた。天高く雲淡く、炎のような紅葉。まさに「藍天碧水映紅楓（藍天に紅葉映え、碧水は紅葉を映す）」である。

この満ち足りた気持ちを少しでも長く持続させたいものと、家に帰ってから菊花を入れた。すがすがしい香りが鼻孔に飛び込んできて、その味はいつもより濃いようだった。ただ、残念なのは、この家は依然としてひっそりとしており、ちょっとした寒さが感じられるような気がする——、もしこの時、私の最愛の二人の連れがそばにいたら、私はきっと熱燗を勧め、そして蟹を何匹か探し求めに行くのだが……。

- 1 昭和記念公園……昭和天皇在位五十年記念事業の一環として、1983年に東京都立川市・昭島市に開園された国営公園。
- 2 杜牧(晩唐を代表する詩人 803-853) 「遠上寒山石径斜白雲生処有人家，  
停車坐愛楓林晚霜葉紅於二月花」より

**忱淳** Chen Chun (1960～)： エッセイスト。江蘇省出身。中国古典の素養に裏打ちされた豪快かつ繊細な筆致で、日本の自然の風物をテーマに、詩情あふれる随筆を発表し続けている。





(中国語原文)

## 枫 意

忱 淳

提起晚秋，总不免生起凄清悲凉之情……满地的落叶、满树的枯枝、满目的苍凉。然今日则不然，昭和纪念公园给我上了一课：秋色不贫，其魅也夺秀。

耀着淡淡金光的银杏树列队成行；满地的落叶犹如为迎接宾客而特铺的金色地毯，虽不华丽，却略感贵气。

更让我直至此时都还沉醉的是那似火样般红得热烈的枫叶。我在想，莫不是西风酿造的秋酒被枫偷偷地饮了个饱，要不此枫怎会这等的彤红。

故人杜牧曾有诗句“……，霜叶红于二月花；”今日我也喝了这“秋酒”斗胆说句不知羞不知耻的话：“敢与春鲜争娇艳”。

日本庭院，那该是静得让人恬静的地方。然今日，她充满生机活力。天

高云淡，枫叶似火。真是……蓝天碧水映红枫。

为了让这份惬意持续的更长更久，回到家泡上了一杯菊花茶，一股清香即刻扑鼻，其味儿也好似浓于往日，只遗憾这家依然是清清凉凉，还似乎有那么一点寒意——，如果此时我的另外两个最爱伴之左右，我定会斟上一壶热酒，再去觅上几只螃蟹……。

